
静けさの中

カルネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静けさの中

【Nコード】

N9818B

【作者名】

カルネ

【あらすじ】

華道の家にも生まれたが、藤村椿は日々を平凡に送っていた。ある日、とある理由で受けることになった見合いである男に出会い。

プロローグ（前書き）

はつきり言って読みにくいです。自分の文才のなさは自分でも分かっています。けど最後まで読んでくださったらうれしいです。連載が終わるのは一年ぐらいかかるかもしれませんが、首をながくして待っていてください。

プロローグ

プロローグ

人の人生には二通りの道がある。自ら選択した道と、自分ではない誰かに選択された道。私の場合後者だった。

私の十七年の人生は幸福とは言い難いけれど、不幸とも言えなかった。

私の母は藤村家という古い家に生まれた。

蝶よ、花よと、何不自由なく暮らしていた母。父と出会ったのは、母が十八の頃だった。父は若手実業家として母の結婚相手として申し分ない、と母の父、私の祖父は思ったそう。実際、両親が寄り添うように写る写真はお似合いだと、娘の私でさえそう思った。結婚式は盛大に行なわれ、幸せそうな二人の笑顔がずっと続くように思われた。

ある日のこと。

父の不在中に書齋で本を読んでいた小学生の私を追って来た母は、ごみ箱のなかに入った普段買わない女性物のブランドの袋を見つけてしまった。母は何気なく父にそのことを尋ね、父はあまりよく見ずにその袋を母から取り上げた。まだ幼い私にも父の様子がおかしいことがわかった。母にはそれが何を意味するのかがわかったのだろう。いつもすぐに父の後に付いていく母が、その日は、足元から見上げる私をやさしい腕でそっと抱き締めた。

崩壊の足音はいつも静かにやってくる。人の思いは永遠ではなく、変わらないものは何もないのだ、と母はどこか遠くを見つめながら呟いた。

一年が経ち、父はあまり家に帰らなくなった。

母は何も言わずにただ父のことだけを考え家を守り、いつも毅然とした態度で父にも親族にも接した。ただ、私だけにはときどき甘え

るように抱きつくことがあった。それが何とも言えずうれしく、母に頼ってもらえることが私の背中をしゃんとさせた。人の目からみれば私は大人びた可愛げのない子供だったと思う。けれど、それは母を思う子供の精一杯の背伸びだった。

父と母が愛を誓い合った日から十年の時が流れ、あの日の幸せそうな笑顔にはもう戻れないと父と母は判断したようだった。

たった二人での最後の旅行。父と母は山奥の別荘に一泊二日を出掛けた。

その日は霧雨で山へと続く道は乳白色の霧がかかっていた。そこからのことは詳しくは分からない。燃え盛った車を調べると、ブレーキオイルが少しずつ零れていたようだった。車両が不良品であったのではなく、意図的にブレーキオイルが零れていくように母が仕向けたのではないかと親族でさえも噂し、気高く美しかった母を写真にさえも人々は蔑みの目を向けた。

そんな噂のある嫁の娘を父方の家族は引き取りたくないようで、父方の祖父母は一度も目を合わせようとしなかった。母の兄弟夫婦でさえも私を引き取るのを渋り、危うくたらい回しになるところを母方の祖父の一言に救われた。

「私の所にくるといい。味気ない老後の一人暮らしに最後の華を添えてくれれば良い。」祖父は普段人のすることに口出ししない寡黙な人だった。にもかかわらず、私のために言ってくれたこと、それが何よりもうれしかった。

祖父の所で暮らし始めた九歳のころ。

祖父の家は兄弟夫婦のいる母屋から、濃い緑に囲まれた石畳を通る離れになっていた。

離れといっても、祖父の家は十分すぎるほど広く、今まで洋風の建物に住んでいた私にはここは人の暖かさがあると思えた。

一部屋一部屋は広すぎないくらいに広く、よく手入れされていた。

祖父に案内されて与えられた寝室に入ると、和風の家には不釣り合いなほど大きくて乙女チックな天蓋つきのベットと、アンティーク

の机と椅子が置いてあった。少しだけ泣きそうになりながら祖父を見ると、やさしい眼差しで見つめ返してくれた。

祖父と暮らし始めてから八年が経ち、私は十七になった。

相変わらず、兄夫婦は私に冷たく、自然と彼らに向ける私の目は冷たくなった。藤村家において、私の存在は数少ない汚点だと、兄夫婦が話しているのを聞いたことがある。それがわざとであることは、伯母の嘲笑で分かった。そんな生活を続けながら、祖父の他に従兄妹の如月さんと臯月さんと仲良くなれた。たった三人が私のここでの全てだった。

だから私は伯母の話を受けることにした。臯月さんに来たお見合い話を。臯月さんには誰よりも幸せになってほしかったから。

第1話 友人志願

椿

祖父に付き添われて向った先は東京プリンスホテル。

相手の男性は相当金銭的余裕のある方だと分かった。相手の男性の顔写真は見せてもらってはいない。どんな人なのかも分からない見合い。けれど不安も心配もない。伯母のいつも通りの冷たい態度のせいだろうか。優しいことなど一度もなかった伯母だというのにその変わらない態度が私を落ち着かせていた。このお見合いに何のメリットが有るのかは知らない。けど、臯月さんにとって有益であることは分かる。

伯母は相手の方と先に会って話をする事になっている。私は祖父と一緒にホテルの一室で伯母の合図を待っていた。

「椿。」

祖父の穏やかな声。

私は窓際から祖父を振り返った。

「何？お祖父様。」

もつすぐ七十五になる祖父はまだまだ現役だといって元気なだけあり、杖をつきながらもしっかりした足取りで歩いた。

「お前はこれでいいのか。由紀子さんの言うままに見合いを受けて。」

「ええ、いいの。どうせお見合いといっても形だけのようなものだもの。伯母様が何がしたくてお見合いになったのかは分からないけど。」

祖父の心配はいつものことだがやはり嬉しいものだ。思わず頬がゆるみ、祖父に珍しい笑みを向けた。

結局、伯母が呼びにきたのはそれから三十分後のことだった。

長く待たせたというのに伯母はたいして悪いとは思ってないようだ。

伯母は私たちが来たことに気付いてわざとらしく、笑顔を作った。どうも今日の相手の仲人の御婦人が、気になる相手らしかった。互いに親しげに話しているが、言葉の裏に潜む対抗意識に心の中で苦笑いが零れた。

御婦人と伯母の方にばかり気をとられていて、相手の方に気付いたのはそれからずいぶんたってからのことだった。

いかにも女性の好みそうな王子さま風な男性だ。雰囲気をやわらかくて優しいげに感じさせる栗色の髪。穏やかな表情を浮かべて、こちらにわずかに笑みを向けたところを見ると、この状況を気にも止めていないようだ。

「どうぞ。」

彼はさっきと同じ笑みを浮かべながら、完璧な所作で私の前の椅子を引いた。

かすかに頭を下げて彼に礼を言うと、こちらにまったく興味がなかったように思われた仲人の御婦人が、じっと彼を見ていた。それに彼は苦笑いを返し、自分の席に座りなおした。それらの視線には何の興味もないわけではなかったが、彼らの間には通じられるものがあるのだろう。御婦人とは近い間柄なのかもしれない。

「申し遅れました。私はこの子の伯母で有栖川奈緒子と申します。この子は甥の泰彦です。よろしく願います。」

上品な和服の女性だ。雰囲気がとても若々しくて、相手の方と兄弟だと言われても納得してしまうだろう。

「こちらこそよろしく願いますね。泰彦さんとは何度もお会いしていますし、私の自己紹介はいいでしょう。この子は私の姪の椿です。」

余所行きの猫なで声で伯母は話した。

正直に言えば、私は伯母のこの声が嫌いだった。伯母自身が何か私にしたことはないが、この声の裏に潜む感情や、仮面を剥がされたあとの冷たく絡み付くような声が嫌いだった。

私は終始俯いてばかりいて、顔をはつきりと上げて聞いていたわけではないが、伯母たちの間で何か話し合われたようだ。お見合いではお決まりの、若い二人で…の件が口にされたのだろう。

私たちはこれまたお決まりの『庭を見ながら散歩』になった。

私たちは特に特別なことは話さなかった。主に、どんな仕事をしているか、を話しただけだ。一応私の年齢では華道の先生として生徒をもつことが許されていたので、前家元である祖父に習いながら華道を教えていると話した。彼はそれを驚きながらも誉めてくれた。彼は家の仕事を継いで家を守る役目にはないので、気楽に家の仕事を手伝っているのだという。

たった数十分話ただけで何が理解できたわけでもないが、彼が誠実な人間であることはわかった。彼をただ外見だけで判断するならば、カラーのような穏やかな華やかさを思わせるだろう。しかし、私には彼が空へと真つすぐにのびる力強い杉の木だと思えたのだ。

「また、会えますか？」

「えっ？」

「こんな形で会うことになりましたが、友人になっていたいただきたいんです。僕にはあまりいいから。」

正直、困惑した。彼が求めるのはたまに会って、楽しく言葉を交わして後腐れなく別れるような親しさではなく、連絡しあって互いを心配したり思いやつたりするような関係に思えた。私には親しい人は両手に余るほどしかない。そんな私に彼の期待に答えられるとは思えないのだ。

「あなたの周りには親しく言葉を交わす友人はいないのですか？」

「親友がいます。けどあなたのような平等な方はいません。」

「なぜそれほど私の友人になりたいのですか？」

「……」

「答えにくいのでしたら……」

「いえ！いえ、答えられます。僕にはしたいことがある。そのために信頼できる仲間が必要なんです。」

彼の言葉は真実だと私の勘が告げた。

疑問はたくさんあった。したいこととは何なのか、そのために私が必要だといったが、何ができるのか。

— 先ず、私は彼を安心させるために微笑んだ。今の私は安心できる雰囲気にはほど遠いだろうから。

「私でいいのなら。」

ずいぶんと譲歩して下した決断だった。

「ありがとうございます。」

彼はそう言っただけかすかに微笑んだ。

顔のさわやかさに似合わず、ずいぶんと意志が強いというかごり押しだというか。すくなくとも悪気はないのだろう。話によれば二十一だというから、私よりも四歳も上だ。だが、彼の方が年下のように思える。

結局、実り(?)のある一日だった。さわやかなごり押し男と友人になったし、お見合いはたぶんご破算になったし。

まあ、いいんじゃない？

第2話 対面(1)

友人として付き合ってみると、彼はとても思いやり深く、優しくするだけの優しさを持った人ではないと知れた。でも一つだけ予想もできない一面もあったのだ。

「もう、どうして教えてくれなかったの？」
もつうんざり。

なんなの？このカップルは。真っ昼間からイチャイチャと。
「ごめんね。びっくりさせたかったんだ。僕にこんなに美人の友人がいるんだって。」

ちよつと、何なのその声は……惚気きってるわよ……。

「いいかげんにして。」
私の機嫌の悪い声に何か感じたのか、可愛らしい人の体がビクッと跳んだ。

何だか悪い人の気分だわ。

「あつ、大丈夫だよ、椿はいじめたりするような人間じゃないから。」
「言われなかった語尾に、恐くないよ、と付くように思えたのは気のせいじゃないだろう。」

「いじめなんてしないわ。無駄なもの。」
「確かに無駄なことはいないだろうけど、その前に椿には人を傷つけたりはできないよ。」
「確信を含んだ言葉。少しばかりくすぐったい。」

わずかにそれた話題を元に戻すべく、勢い込んで話した結果がこれ。本当にどうしようもない。

「恋人を紹介してくれるって聞いていたんだけど……」

「恋人だ。椿なら偏見でものは言わないだろう。」

「ええ、そうよ。偏見や先入観は、人を正しく判断するのに間違つたものしか与えない。でも……まさか貴方が可愛らしい男性を連れてくるとは思わなかったの。」

そう、彼の恋人は男性だった。それも、私よりも格段に可愛らしい。

彼の恋人こと、仙崎真澄さんは、どこからどう見ても可愛い小動物のような人だった。

私よりも数センチ違うだけだ。

思わず右手で頭を支えながら深いため息を吐いた。本当に無意識にだ。決して他意はない。

だけど真澄にはそうは思えなかったようで、少し不安そうな上目遣いで見られた。私の反応からあらゆる可能性を考えているようだ。

「私と有栖のこと疑っているの？」

真澄の体がびくりと跳ねた。

「凶星ね。」

「あつ、いじめちゃダメだよ。椿と違って繊細なんだから。」

あまりにも失礼な言い分だ。彼がこういう人間だと知っているからたいした怒りも湧かないが。

「有栖、何でここにくる前に話さなかったの？そうした方がスムーズにことが運んだと思うんだけど。まあ、予想はつくけどね。」

「わかってるならいいじゃないか。」

この男……。馬鹿なのだろうか。

「話さないことは貴方にとって何でもないことかもしれないけど、仙崎さんにとってもそうであるなんて思わないことね。」

少しきつい言い方になるが、彼はこんなことで怒るような狭量な人ではない。少なくともそう思っている。

「貴方の口から私たちの関係を事細かに説明するの。初めて会ったときのことから全部ね。」

有栖は不貞腐れているような顔をして私をちらつと見た。

「わかったよ。全部話す。」

少々不本意そうだが、これも彼らのためだ。

証拠に、有栖が説明してくれるって聞いたときの顔がほっ、としてた。やっぱり気にしていたんだと思う。

「僕と椿の出会いはお見合いだったんだ。伯母がいつも持ってくる縁談の一つだった。椿に初めて会った時、この人の中には強い意志と先を見通す目があると思った。それから、ちよつとのことじゃ揺るがない強い心もね。この人なら、真澄のこと、きつと手伝ってもらえろと思つた。だから椿に友達になつてほしい、って言つたんだ。椿は僕にとつて、すでに穂高と同じくらい大切な親友だよ。真澄にも好きになつてもらいたいんだ。」

「うん、わかつてる。この人は憎まれ口を叩きながら、いつも人のためを思つてる優しい人だつて分かつたから。」

少しだけ恥ずかしそうにこちらに微笑みかけてきた真澄を見て、彼の本心がわからなくても、有栖が何故彼を好きなのかわかるような気がした。

「実際は貴方の言うような優しい人間じゃない。私は感情を抑えていられるような人にはなれない。ただそれだけ。」

本題からずれにずれたけど、まあ少し打ち解けてきたように思えた。

「それよりも、本題の……」

「じゃあ、なんでお見合いなんかしたの？自分から言いだしたわけじゃないだろう？」

まったく、この男の口をふさぐ方法はないの？ちつとも前に進まない。

「どうしてですか？」

クリクリとしたつぶらな瞳のこの子までもが……はあ……

「……従姉の代役よ。今年で二十歳になる。」

「その子が来たくないって？」

「違う、皐月さんは何も知らない。私が見合いを受ける代わりに伯母と取引したの。この事を皐月さんに知らせず、私の願いを一つ叶えさせて欲しいって。」二人が顔を見合わせた。それは何ら不思議じゃない。だって、たかがお見合いがどうして取引材料になるのか、彼らには検討もつかないんだから。

「後で調べて分かったの。貴方とお見合いしたうまくいかなかった令嬢は、その後二、三カ月間陰で笑われる運命にあるの。」

これも彼には検討もつかない答えだろう。

その証拠に彼には眉間にはつきりとした縦皺がある。

「どうして？」

いつもより低い声。どうも理解できなくてというより、単純な怒りらしい。

「貴方、自分が何て言われているか知らないの？穏やかな笑みを浮かべる氷の貴公子だって言われているのよ。」

「そう、で、どういう意味？」

この……馬鹿！

「仕草や表情は優しいのに、笑顔でそれ以上近寄らないように牽制しているみたいに見えるんでしょ？」

真澄！貴方は頭が良いわ、有栖と違って。

「よく分かるね。」

そこ、そんなことで感心しない。

「だって、初めて会った時、僕もそう思ったから。」

ほんの少ししんみりとした空気が流れた。真澄はその時を思い出すようにしているようにわずかに目を細め、幸福そうに微笑んだ。

「あの時の泰彦はすごく近寄りがたくて、すれ違うのだけでも緊張したんだ。」

有栖は初耳だったようで、数秒真澄をじっと見つめた。さながら、生まれたばかりの動物の仔が、初めて見る世界に好奇心を抱いているかのように。

「でもさ、よく見ていると泰彦は表情が豊かで、穂高と軽口をたた

いている時が子供みたいですごく可愛い人なんだって思った。」

可愛い？想像できないわ。

「真澄……君、そんな前から僕のこと好きだったんだね。」

口調は至って真面目。でも、表情は気持ち悪いくらいに惚気切つてる。

「仲良くなさりたいのでしたら、他の所で仲良くなさったら？」

「そうだよ、ああ、でも移動する時間がもつたくないよ。」

この男に厭味は通じないのだろうか。厭味な笑みを浮かべていた顔をもつと厭味な満面の笑みにした。

もつとも、有栖が私の厭味に気付いていたとしても、自分の望みを実行するために無視するだろうけど。

私が移動したほうが早いし、簡単なんだろうけど、まけるみたいで癪。でも、今日ぐらいは負けてやるか。

不本意だけれど。

「ごめんなさい、この後約束があつて。これで失礼させていただきますね。仙崎さん。」

着物で少し動きがゆっくりだったが、できるだけ速くきびきびとした動きで、二人きりにするためにドアへ向かった。

背中に物言いたげなおそらく、真澄の視線が張りついていた。真澄にはこの状況に困惑と恥ずかしさしか抱かないだろうが、なんとなくほつとしている。有栖のあんな顔を見れたから。

なんだか穏やかな気持ちが一つと、心に広がった。

個室のなかを区切るためのドアの前の衝立ての陰から、そつと中を伺えば、何とも言えない幸せそうな二人がいた。

その姿がなぜかある二人に重なって、知らず知らずこぼれていた笑みが、不安の中に埋もれてしまっそうだ。

私にもいつか、あんな風に笑い合える人が現れるだろうか。

でもきつと、それは幸福な事なのだろう。

……たどえ、どんなに苦しくとも。

対面(2)

防音設備の整った個室のドアは思いの外重く、必要最低限の荷物しか入っていない巾着袋と、自分の飲み物が邪魔だった。

何も持っていない右手に力を入れてドアノブを回して押しても、重りがかかっているようにびくともしない。

二人に助けを求めれば良いのだが、自尊心が邪魔をして言いだせなかった。

と、唐突に扉の重りが失せ、

「きゃっ！」

体が何か硬いものにぶつかっただのと同時に、何か濡れた感触があった。手に持っていた飲み物が着物のほうにかかったようだ。

「あっ」

今日着ていた着物は母の形見だった。秋の風景を愛した母のために祖父が作らせたものだ。

「申し訳ない。」

着物にばかり気をとられていたために気付けなかった。

ぱつと顔を上げると、スーツを着た二十代前半に見える男が立っていた。大変きれいな男だ。繊細で優雅な印象を与える容貌、それでいてなよなよとした女々しい感じはせず、手で触れている胸板から、しつかりとした肉体があることが分かった。

「……いえ。」

はっ、と我にかえって返事をしたのは数瞬あとのことだった。もともと表情が豊かなほうではないから、動揺を気取られる事はないと思うが、顔を上げているのに気まずさを感じ、俯いて体を離そうとした。

「……あの、離れたくありませんか。」 離れようとした椿の手を胸に押し当てたまま握り締めて、男はじつと見つめてきた。

男の手の中から自分の手を取り返そうとしたが、男の力がとても強くてどうしても抜き取れないのだ。

「着物に染みが付くといけない。すぐに拭き取らなくてはいけませんね。着替えの物を持ってこさせましょう。」

青年は丁寧な口調でそう言ったが、私の手を握る手を離そうとはしなかった。 新手のナンパか？

いつのまにかこの責任者らしき穏やかな紳士が傍に控えていた。「桐生様、準備が調いました。お嬢様のお着替えが用意されております。」

桐生と呼ばれた青年は至極当然のこと、とでも言うように、自分の父親ほどの紳士に尊大にうなずいた。

顔には出さなかったが、私は相当動揺していた。桐生の尊大な態度にはではない。彼のスーツを見ればシンプルだが安物ではないと分かったし、腕に付けている時計は私でも知っている、某高級ブランドの新作だ。そんな、見るからに裕福な青年がこの上客ならば、あの尊大な態度も頷ける。

問題はその名前にある。桐生は日本で最も影響力のある家の名前だ。

桐生グループの傘下には、あらゆるジャンルの企業があり、日本の企業の中にこのグループが関与していないところはないと言われている。表の世界ではときどきしか聞かない名だが、裏の世界では常に噂が飛びかっている。 そんな黒い（おそらく私の想像と偏見のイメージの）一族の人間がなぜ、こんなことをするのか。華道の名門といえども、そこら辺にいる普通の女子高生と何らかわらないの。

そうこうしているうちに、体は桐生にひっぱられるまま和風の個室に押し込められた。少々むっとする。

「こちらにお着替えを用意させていただきました。」

乱暴者ではあるが、女性が着替えようとしている部屋に長居しない、という基本は分かっていたようで、気が付けば落ち着いた女性店員と部屋に二人きり。

仕方なく、用意された洋服に袖を通し、きれいに畳もうとすると作り物めいた雰囲気を感じさせない優しげな笑みを浮かべた女性店員に、やんわりと拒否されてしまった。

「着物は桐生様より、専門の業者の方へ運び入れるように仰せつつっております。」

やはり、接客業のプロだ。ともすれば強引ともとれるような行動も、ささやかな好意のような好印象を与える。

思わず笑みを返したが、断りを入れることに微かな罪悪感を感じていた。

「ご好意は有り難いのですが、懇意にしているところが…。」

「そうですか。承知いたしました。では、着物はそちらの方に…。」
老舗店の名前を言うと、知っていたようで、軽く頭を下げてから部屋を出ていった。

扉が小さな音を立てて閉じると、軽い緊張状態だった体から強ばりが解け、あるかなしかの小さなため息が零れた。

気が抜けてしまった体を、大きなソファに沈めた。

目を瞑ってしまえば、最近の多忙な日々の所為か、堪え難いほどの心地よい眠りが椿を包み込んだ。

沈黙の充ちる部屋では、時計の動く規則正しい音がやけに耳に響いた。

チクタク、チクタク。

だんだんとその音も遠ざかっていくように思え、終には何も聞こえなくなってしまった。

常ならば到底ありえないこと。

その日の椿は疲れていたし、ここに集まることになったのも昨夜だった。悪態を心の中でつきながら、彼らはその日しか空いていないのだから仕方がない、と自分を納得させたのだ。

今思えば、このことは彼らと自分の未来に必要なことだったのだらう。

認めてしまいたくはないが、自分とあの迷惑男ためにも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9818b/>

静けさの中

2010年11月5日23時19分発行